第 64 号
発 行 所
独立行政法人国立病院機構
仙台医療センター附属
仙台看護助産学校同窓会
仙台市宮城野区宮城野2-8-8
電話　022-293-1111　内8100
印刷所　株式会社印刷館

同窓会会報

独立行政法人国立病院機構
仙台医療センター附属仙台看護助産学校
創立年月日　昭和22年９月１日

就任のご挨拶



事務部長　**大泉英二**

4月1日付けで弘前病院から配置換えで参りました大泉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

仙台医療センターでは、平成14年4月から平成17年3月までの3年間勤務し、今回2回目の勤務になりますが、建物は新しくなり場所も変わったため、新しい病院に初めて勤務するような気持で、気を引き締め取り組んでいかなければならないと感じております。

また、学校関係では、山形病院、仙台医療センター、福島病院、弘前病院と東北にある全ての学校事務に携わり、貴重な経験をさせていただきました。それらの経験を生かして、今後も学校運営に頑張っていきたいと思います。

さて、宮城県を始め日本各地が新型コロナウイルス感染症で「まん延防止等重点措置」、「緊急事態宣言」が出される中、皆さんは感染症対策の徹底を図り、飲酒を伴う会合の制限、旅行の制限など1年以上にわたり自粛生活を送られていることと思います。

また、マスク着用、会話も制限され、相手の表情、感情、思いを理解することが難しいためコミュニケーションがなかなか取れず、日常の生活や仕事においても意思伝達が思うようにいかず支障をきたしているのではないかと思います。

コミュニケーションとはどういうものか。辞書で調べてみると、『社会生活を営むうえで、人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと。言語・文字・身振りなどを媒介として行われるもの。』と書かれていました。実際、コミュニケーションはよく、キャッチボールに例えられます。思いや感情を、言葉や文字（言語）、身振りや表情（非言語）の方法で、相手に投げたり、相手から受け取ったりすることで交換し、お互いを分かり合うことだと言えます。

しかし、このコロナ禍では前述のとおり非常に難しい状況で、意識してコミュニケーションをとり、患者さんとの信頼関係、職場内、学校内での仲間同士の信頼関係を構築し、病院運営、学校運営していくことがいつも以上に必要な時期だと思います。

新型コロナウイルス感染症がいつ収束するか見通せず厳しい状況が続きますが、当院の理念の1つでもある患者さんにやさしく働きがいのある病院を目指せるよう、学校の方々に協力を頂きながら、コミュニケーションを駆使し頑張って参りますので、今後ともご指導ご支援を宜しくお願いいたします。

第31回同窓会総会開催のご案内

会長　**佐々木和子**（看31回生）

同窓生の皆様にはお変わりなくお過ごしでしょうか？

コロナワクチンの接種も進んできており、会員の皆様も多くの方が接種されたことと思います。とはいえ、感染対策は変わらず継続していく必要がありますので今後も十分に注意を払って生活していきたいですね。

さて、同窓会総会のご案内を会員の皆様にお送りしております。このような状況ですので、懇親会等は開催せず、総会のみ行うことに致しましたこと、ご理解いただければ、と思います。ご欠席の場合は委任状の提出を期日までよろしくお願いいたします。

日時：令和３年11月13日（土）
14時～
場所：仙台サンプラザホテル
日程：受付開始　13時30分
同窓会総会　14時～

新型コロナウイルス感染症と向き合っていくこと

仙台医療センター
臨床研究部ウイルスセンター長
西村秀一



コロナ禍が始まって以来「正しく恐れる」という言葉が世の中に溢れています。でもこれまで見聞きしてきたことは、私には正しく恐れる方向から逸脱しているように思えます。恐れるという感情は、人間の根本にあるもので避けようがないのですが、恐れ過ぎを背景に、理屈に合わない対策がとられてきたようです。では、理屈に合ったものとは何か。それは蓄えられてきた知識や理論体系としてのサイエンスと新たに判明した事実、それらを統合したきちんとしたロジックに基づく対策です。論理の飛躍や単なる空想の産物を排除した健全なる常識ともいえるでしょうか。どうもそれらに合致していない「感染対策」が、やりすぎの形をとっていろんな場面に見られます。

ある人からメールで相談を受けたことがあります。新型コロナウイルスについてメディアが流す感染対策情報を素直に信じ、それに準じて生活しているうちに、心身ともに疲れ切っているという悩みが綴られていました。社会生活では様々なものに手が触れるが、そこには常にウイルスが付着しているのではと不安に駆られ、手洗いや手指の消毒を頻繁に繰り返す生活になっている。まるで強迫神経症のような状態になり、日常生活に支障をきたしていると言います。例えばスーパーで購入した食品包装の表面へのウイルスの付着が不安になり、包装パッケージをアルコール消毒せずにはいられないそうです。さらに自宅のドアノブやテレビのリモコン、コップ、皿やドレッシング容器にも不安を感じ、消毒し始めたというのです。そしてそれを自分だけでなく他人にも求め始めていると言います。言うべきことは、机の上がウイルスで汚染されているから消毒しなくてはならないなど、接触感染のリスクを大きく見積もりすぎるなということです。机を一生懸命消毒するのはウイルスがほとんどいない道路を消毒するのと同じです。院内感染のリスク管理が必要な医療現場と違い、一般の人が自宅のテーブルをアルコール消毒する必要などないのです。洗剤に浸したクロスで丁寧に拭くだけで十分です。もし、そこにウイルスがいたとしても、そうやって分散させれば感染性があるものもごく少数になり、短時間でウイルスが死滅しやすくなるので、感染リスクはほぼなくなります。私の考えでは、空気感染がメジャーな感染様式だと考えています。3密を避けることは空気感染対策としては正しいことで、マスクも今まで通りの使い方でいいと考えます。



ただ、顔を守るフェイスシールドは、丈の長いものを除き空気感染の防御にはほぼ役に立ちません。面と向かって飛沫を吹きかけられないようにするには効果があるかもしれませんが、空気中に漂っている粒子については、むしろあごの付近で空気を巻き込んでしまいます。マスクをつける際も、感染防御を目的とする場合は空気感染を想定する必要があります。隙間なしにピッタリ装着するといった方法が有効で、こういう基本的な対策を行っていくことをお勧めします。マスクは漫然とつけているのではなく、密が重なるような感染のリスクが高い場面で、緊張感を持ってしっかりフィットさせて装着する、こういうことが大事だと考えます。使用中のマスクの表面はウイルスで汚染されている、という話があります。これは医療現場などで、直接咳やくしゃみを浴びせられた直後、しぶきで濡れた場合は当てはまりますが、ほとんどは空中浮遊したウイルスはマスク内のフィルターに引っかかっていて、手に付着することもほぼありません。汚れた場合はマスクを変える必要がありますが、日常的に使うマスクは、ウイルスが口や鼻から入らないように考えた場合、空中のウイルスを通さないフィルターの性能が保障されているものをお勧めします。ポリウレタン製のマスクはフィルターとしての性能が低いことがわかっており、お勧めしません。

ここまで新型コロナウイルスに対しての不安や、有効な感染対策についてお話しました。ほとんどの方が感染拡大を恐れていると思いますが、流行性の感染症は、感染が広がるほど重症化率が落ちていくのがふつうです。そこはある程度確信的に言ってもいいかもしれません。今は報道にあるように、ウイルスが変異すれば強毒化すると心配されています。感染症の歴史からは、当初は強毒でも長期的に見れば感染が広がっていくうちに毒性が失われていくことがわかっており、歴史的に見れば今の状況もそのような流れになると考えています。何年かかってそうなるかは断言できませんが、今後のワクチン接種の推進や、効果的な治療方法の定着などと合わせ、インフルエンザ程

↑

度の感染症になっていってもらいたいものです。

コロナ禍を生き抜くため、現在まで「新しい生活様式」が提唱され、推進されてきました。「ソーシャルディスタンス」や「黙食」といった日常生活の中での感染対策は、現状は続ける必要があると思いますが、最終的になくしていく必要があると思います。感染を防ぐための生活様式を続けていくにしても、私たちは、人間らしい生活を取り戻すために、以前の生活に戻れるようにしていくべきだと考えています。必要な感染対策を絞り込みながら、コロナを過剰に恐れず、「普通の感染症」として対応できるように、もとの生活をひとつひとつ取り戻していきたいものです。

就任のあいさつ

仙台医療センター附属
仙台看護助産学校
看護学科教育主事
酒井仁子

今年度より看護学科教育主事を拝命いたしました酒井です。私は、この附属看護学校を卒業後、当時の国立仙台病院に就職しました。就職してからこれまでに、臨床、学校教育など様々な経験の機会をいただきました。臨床に勤めていた時は、毎年新採用者を迎え入れてきました。管理職の立場になり、環境の変化や患者さんとの向き合い方でジレンマを抱えながらも努力する姿をみて、本人自身の持ち味・良さを本人も気づいて活かせるようになるにはどうしたらよいかと、より考えるようになりました。

新型コロナウィルスの感染拡大により、実習や講義、自治会活動においても、感染対策を優先し対応しております。これまでと同じようにはできなくても、「できることは何か」、「できるためにはどのようにすればよいか」を教員だけでなく、学生も考えており頼もしく感じています。そして、日々の生活の中で、医療職としての倫理的行動を問われていると感じています。

コロナ禍であるからこそ、正しい知識の習得や倫理的な行動、そして柔軟な対応ができる思考力について真剣に取り組める機会なのではないかとも思います。このような日々の取り組みを通し、学生が当校や自身の持ち味・良さを再認識し、国立病院機構の理念である「患者の目線に立って懇切丁寧に医療を提供する」看護師を目指していけるよう、同窓生の皆様のお力も借りながら支援していきたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

同窓会報誌の郵送希望アンケート結果報告

佐々木　晃子（看46回生）

かねてより検討されてきました同窓会会報のWeb化について、令和元年第30回同窓会総会において承認され、令和３年１月より仙台医療センターホームページ内の附属看護助産学校のページで閲覧が可能となりました。また会費の徴収につきましても卒業時のみ納付とする旨会則が改正されております。これらを踏まえ、今後会報誌の印刷・郵送を段階的に減らしていくため、郵送を希望するかどうかアンケート調査を行いましたので結果をご報告致します。

全体における割合は、希望する方13％、不要の方87％でした。いずれの年代においても不要とする回答が多い結果でした。

希望する理由として、パソコン・スマホを持っていない・苦手、紙の方が見やすい、紙で毎号保管している等の声が聞かれ、また不要と答えた方からは、ホームページで見ることが出来る、ペーパーレス時代、経費削減のため等の声が聞かれました。

希望される方には郵送を継続させていただきます。また同窓会総会の案内については引き続き、皆様にハガキでご案内させていただきますのでよろしくお願い致します。

今後の課題としましては、再評価の時期をどうするかという点があり、今後検討して参ります。

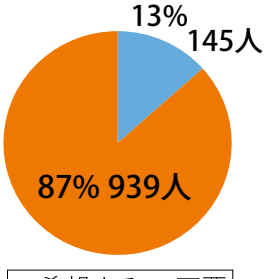
最後に今回アンケートにご協力いただいた皆様ありがとうございました。ご意見欄では、役員を労うお言葉をたくさん頂戴致しました。この場をお借りして感謝申し上げます。

今後とも同窓会活動へのご協力をよろしくお願い致します。

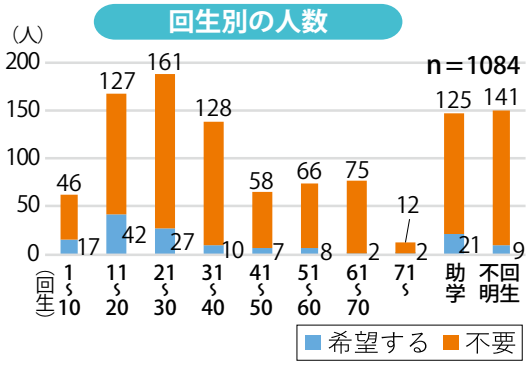
アンケート

実施期間：令和3年2月1日～4月30日
送 付 数：3348通
回 収 数：1088通（無回答4通）
有効回答率：32%
回答方法：「郵送を希望する」「郵送は不要」いずれかを選択する

郵送希望 全体の割合



回生別の人数



学校のトピックス

祝 卒業

令和３年３月４日に看護学科第72回生81名、助産学科第44回生25名、計106名が卒業を迎えました。卒業式は、学校長、副学校長、高橋看護部長に来校頂き、各教室にて学生と教員で執り行われました。

卒業生たちはコロナ感染禍において臨地実習が大変困難な状況となり、看護学科は２クール目まで、助産学科は分娩期実習のみとなりました。そのため、学内実習が中心となりましたが、教員と共に看護技術の演習を行ったり、病棟スタッフが作成してくれた看護技術の動画をみたり病棟とのWebカンファレンスを行ったりしながら学びを深め卒業を迎えることができました。

４月より各々新たな環境で頑張っていることと思います。この学校で学んだ事を土台に日々の中での学んだこと、経験したことから新たな知識を積み重ねて頂きたいです。今後のご活躍を期待しています。

令和２年度卒業生の就職・進学の動向

就職先／学科	看護学科	助産学科
独立行政法人　国立病院機構	73%	36%
独立行政法人　国立病院機構以外（進学含む）	27%	64%

祝 入学おめでとう

令和３年４月７日、看護学科75回生80名、助産学科45回生25名、計105名が晴れて入学となりました。看護学科、助産学科に分かれ学校長、副学校長に来校頂き、各教室にて学生と教員で入学式が執り行われました。看護師・助産師になるために入学した学生たち。一人一人が目標に向かい日々の講義や演習に取り組んで頂きたいです。今後の成長に期待したいと思います。

祝 合格おめでとう

令和３年３月26日、国家試験の合格発表が行われました。第110回看護師国家試験合格率が90.4%、第104回助産師国家試験合格率が99.6%という全国結果でした。当校においては看護学科81名、助産学科25名全員合格という結果でした。学生の教育を支援して頂きましたすべての皆様に心より感謝いたします。

人事異動

令和３年３月31日付
異動された先生
○看護学科
・教育主事
内山　恵吏子　先生
弘前病院附属看護学校
教育主事へ異動

令和３年度
新しく先生をお迎えしました。
○看護学科
・教育主事
酒井　仁子　先生
仙台医療センター
副看護部長より昇任
・教員
白根　庸子　先生
あきた病院
副看護師長より昇任
柴田　尚子　先生
福島病院附属看護学校
教員より異動

編集後記

同窓会会員の皆様。

昨年に引き続き今年もコロナ感染禍となり、さらには変異株による脅威にもさらされながら緊張と行動自粛の生活を余儀なくされていますがいかがお過ごしでしょうか。

仙台医療センターは新病院へ移転して３年目を迎えました。北海道東北地区基幹病院としての役割を果たしつつ、当院スタッフの力を結集しコロナ感染禍における医療提供、医療連携にも尽力しているところです。その傍ら、敷地内に目を向けますと、コロナ感染などどこ吹く風と新しく植えられた桜やツツジなどの木々たちは新しい土に根付き、いのちの力強さを見せてくれています。

待ちに待ったコロナウィルスワクチンの接種が始まり、感染収束への期待が一気に高まります。明けない夜はありません。それぞれが励まし、助け合いながら苦境を乗り越えていけたらと願う日々です。最後に今号発行にご協力くださいました皆様に心より感謝申し上げます。

高橋　紀子
（看48回生）